機関室等に備える通風筒の閉鎖装置に関する事項

改正要領

鋼船規則検査要領 C 編, U 編, V 編, CS 編, N 編及び S 編
海洋汚染防止のための構造及び設備規則検査要領

改正事項

機関室等に備える通風筒の閉鎖装置に関する事項

改正理由

2010 年 10 月にオランダ港内で発生したタグボートの転覆による死亡事故を契機として、IACS において当該事故の対策について検討を行っていた。当該船舶には、国際満載喫水線条約附属書 I 第 19 規則に従って機関室の通風筒に風雨密の閉鎖装置が備えられており、復原性計算において当該機関室は閉鎖された区画として取り扱われていたが、事故調査の結果、運航中は機関室への空気の供給のために当該通風筒を開放状態としており、その開口部からの浸水が転覆の主な原因であったことが判明した。

IACS は、同様の事故の再発防止の検討を行い、運航中に機関室及び非常用発電機室に空気を供給するために開放状態とする通風筒は、当該装置の実質的な使用状況を踏まえ、復原性計算において風雨密に閉鎖することのできない開口とみなす旨の統一解釈案を作成した。

本統一解釈案は、2016 年 1 月に開催された IMO 第 3 回船舶設計・建造小委員会 (SDC3) において合意が得られ、2016 年 5 月に開催された IMO 第 96 回海上安全委員会 (MSC96) において、SOLAS 条約及び IGC コード等に関連するサーキュラーが MSC.1/Circ.1534, MSC.1/Circ.1537, MSC.1/Circ.1538, MSC.1/Circ.1539 及び MSC.1/Circ.1543 として承認され、2016 年 10 月に開催された IMO 第 70 回海洋環境保護委員会 (MEPC70) において、MARPOL 条約及び IBC コードに関連するサーキュラーが MEPC.1/Circ.867 及び MSC-MEPC.5/Circ.11 として承認された。また、IACS は、同サーキュラーと同様の統一解釈を採択した。

このため、上記サーキュラーに基づき、関連規定を改めた。

改正内容

運航中に機関室及び非常用発電機室に空気を供給するために開放状態とする通風筒は、復原性計算において風雨密に閉鎖することのできない開口とみなす旨規定した。

改正条項

鋼船規則検査要領 C 編 C4.2.3, C31A.2.1

鋼船規則検査要領 U 編 U1.1.3

鋼船規則検査要領 V 編 V2.2.1

鋼船規則検査要領 CS 編 付録 1 表 CS

鋼船規則検査要領 N 編 N2.7.1

鋼船規則検査要領 S 編 S2.9.3

海洋汚染防止のための構造及び設備規則検査要領 3 編 3.2.2